

都立大学附属高校の地学巡検に携わったすべての人々へ

五四期生 北山 智暁

あれは何年前の巡検だったろうか。

その日の伊豆大島はあいにくの雨模様で、御神火茶屋から三原山を望むことはできない様相だったのを覚えている。私の前には、右手には傘、左手にはぬれたフィールドノートを握りしめながら、雨音で聞こえづらい私の声を必死に聞き取ろうとする生徒たちがそこにはいた。教師でもない、ただの大学生である私の言葉を、必死に聞き取りメモする姿に、心の底から感動したのを鮮明に覚えている。

私も数年前は、彼らと同じ、都立大学附属高校（以後、都大附と称す）。

当時、私たちはこう呼んでいた）で地学を履修した生徒だった。その私が今こうして後輩たちを前にし、伊豆大島の生い立ち、地球について語っている。当時の私はそんな風になることなど思いもしなかった。

都大附の閉校記念誌に「地学巡検」について執筆する機会をいただいたが、地学巡検の総括については「都立大学附属高校〔研究紀要・第二七号（最終号）

・理科実習・地学巡検（以後、「紀要最終号」と称す）」に宮里康郎教諭が執筆されているので、それをご覧いただきたい。そこで今回、記念誌には、生徒・ティーチングアシスタント（以後、TAと称す）として計一〇年間、都大附に、地学巡検に携わってきた私の視点での、「生徒から見た「地学巡検」」として記したいと思う。

高校当時、私はプロゴルファーとしての将来を夢見ていた。が、怪我によりその道をあきらめざるを得なくなった。そんな私の心の支えになったのが、都大附の地学の授業であった。地学の授業には夢とロマンがあふれていた。地学の授業を一番楽しんでいるのは、それを教える宮里康郎教諭（現在は都立芸術高校）自身であった。そんな授業がきっかけとなり今の自分がある。

都大附の地学巡検について、私は三つの特徴があると考えている。一つは、そのユニークな授業形態。二つ目は、高校と大学が協力する高大連携の仕組み。三つ目は、進路の提供である。

一つ目のユニークな授業形態についてだが、一年に三回も野外巡検（詳細は「紀要最終号」を参照のこと）を行うのは、日本中の高校を探しても稀であろう。これは強調したいのだが、やはり理科の醍醐味は「本物を見る」ことである。地学という学問は野外での観察、調査が大事である。自分の目で見て触って、不思議だと感じる気持ちや学ぶ面白さを教えてくれる。TAとして生徒に接していた七年間で共通していたのが生徒の学ぶ姿勢の変化だ。最初は退屈そうにしていた生徒も、巡検の終わりの方ではノートにTAの言葉を必死で書き取っている。そして、積極的に質問してくる。本来勉強というのは能動的であることを、体感した瞬間だったのである。TAとしての活動を通じて、毎年のようにこんな生徒の姿勢の変化を見てきた。

二つ目の高大連携についてだが、これまで、地学巡検のTAは都立大学の地理学科の大学院生により行われてきた。名前が都立大学附属であることから、都大附と都立大学は深い関係がある（詳細は「紀要最終号」を参照のこと）。しかし、最近では私をはじめとする卒業生がTAとして母校での活動を行うことにより、大学の垣根を越えた活動が定着してきていた。大学生が高校で活動することで、高校に最先端の研究や人材を提供することができる。大学生にとっては、人に教えることの難しさや知識の浅さを痛感することになり、よりいっそうの勉強の必要性を教えてくれる課外活動となっていた。このように双方にメリットのある活動になっていったと思う。この取り組みが続いていたなら、更なる高大連携の発展が見いだせていたのではという気がしている。

三つ目は、都大附の地学巡検を通じ、毎年のように進路を見つける生徒がいるという事実がある。私がTAとして活動した七年間で、ほぼ毎年地球科学の道へ進学していった。地学という授業が、履修科目という

だけで終わらず学生達に進路を提供しているのである。私のように地学の道を志す後輩達が毎年のように生まれ来てきたことが何よりもうれしい。彼らの多くは、巡検のT Aとして母校に帰ってきている。そして、彼らの巡検を受けた学生達の中から新たに地学の道に進む学生が生まれる。こんなにも素晴らしい循環が自然と生まれていたのだった。

また、それ以外の生徒にも自分たちの進路を考えさせるきっかけとなっていた。T Aとして活動する中で、学生達から毎年のように進路についての相談を受けてきた。進路を決める手前にいる生徒たちは悩んでいる。そんな彼らの一歩前を迷いながらも歩いているT Aは、教師には相談できないことを相談できる相手として存在していた。地学巡検はそんな時間を提供する役割も担っていたのではないだろうか。

以上が、私の視点から見た地学巡検である。この地学巡検に参加した方、携わった方はまた別の思いを抱かれているかもしれない。

最後に、都大附の最後を飾る閉校記念誌に執筆させていただく機会をいただいたことに感謝している。私の人生を変えてくれたこの巡検、そして都大附に最後の別れを告げる意味でも、この記念誌への執筆に全力を注いだ。

しかし、執筆を終えるまでに相当の時間がかかり、多くの方にご迷惑をおかけした。なぜなら、これを書き終えたら、本当に巡検と関わるのが最後となってしまおうと思ったからだ。できるだけ、長く自分の手の中で大切にしておきたかった。関わりを終わりにしたくなかった。思い出しにくかった。

ただ、執筆を終えようとする今、迷いはない。なぜなら、振り返ると、宮里康郎教諭、T Aとして関わった生徒達、地学巡検を支えてくれたT Aの仲間達、すべてをあげることができないのが心苦しいが、この地学巡検に携わったすべての人たちの努力が、今の私、そしてこの道を志す後輩達の人生の糧となっていることに気づいたからだ。私が日々、夢と口

マンを追いかけながらこの道で歩み続けることが、都大附の地学巡検があったことに他ならないからだ。

私の中には、地学を心から愛し、楽しむ、都大附の地学の血が流れている。この学校で出会えたものすべてに感謝している。本当にありがとう。

雨の中、彼らは三原山山頂へたどり着いた。火口が見えるところまで残すところわずか。

「できれば彼らに三原山の火口を見せてあげたかった」と思った瞬間、雲の切れ間から光が差し込んできた。

そう。今までの悪天候が嘘のように、一瞬にして晴れ渡ったのだ。霧が太陽光に照らされ、天に昇っていくのがはっきりと見える。目の前に火口が大きな口を開けていた。教師、T A、生徒すべてが、その光景に圧倒され言葉を失った瞬間だった。地学をやっていてよかった。そしてこの光景をこの生徒達と見ることができたことに心から感謝した。